

本論文では、実験室実験、オンライン調査等に基づく7つの実証的研究によって、評判への関心が利他行動に及ぼす影響を検討し、その心理的メカニズムを考察した。

第1章「本論文の目的と理論的背景」では、利他行動に関連する先行研究を概説した。人は他者と助け合いながら社会生活を営んでいる。日常生活の中でしばしば観察される「他者のための振る舞い」は、多くの領域において関心を集め、研究が進められてきた。この行動は様々な形で定義されているが、大きくは行動の背後に存在しうる利他的な動機を前提とする定義 (e.g., 高木, 1998) と、行動の結果のみに基づく定義 (e.g., Fehr & Fischbacher, 2003) に区分される。本論文では後者の立場を取り、その動機に関わらず自己犠牲を払って他者利益を与える行動 (Fehr & Fischbacher, 2003) を利他行動と呼ぶ。

先行研究では、無関係の他者に対する利他行動を支える基盤として、間接互惠性 (e.g., Milinski, Semmann, & Krambeck, 2002) が提案されている。この理論に基づけば、利他行動をとった行為者が、相手からの直接の見返りを得られない場合であっても、第三者から利益を得ることで、利他行動は間接的に報いられ、適応的な行動として機能しうる。ただしこうした間接的な互惠関係が成立するためには、利益だけを得る一方で自らは犠牲を払わないフリーライダーが特定される必要がある。フリーライダーを特定する仕組みの1つが評判である (Fehr, 2004)。過去の行動に基づいて評判を与え、将来の行為者がその評判を参照して利他行動をとるかを決定することで、フリーライドを避けることが可能となる。実際、先行研究では、シミュレーションに基づく検討 (e.g., Nowak & Sigmund, 1998)・実験的検討 (Milinski et al., 2002) の両面において、評判システムが集団内の利他行動の維持・促進に寄与することが示されている。ただし、これらの検討では、利他行動をとる傾向が維持されるうえで評判が寄与することを示してきたものの、評判を気にする心理的選好 (評判への関心) と利他行動の関連は明らかとなっていなかった。本論文では、7つの実証的研究をもと

に、評判への関心が利他行動に至る心理的メカニズムを明らかにすることを目的とした。研究 1, 2, 3A, 3B では、利他行動をとる行為者に焦点を当て、評判への関心と利他行動の関連を検討した。研究 4A, 4B, 4C では、利他行動を観察する第三者に焦点を当て、利他行動に対してどのような評判を与えるかを検討する。これら 7 つの研究に基づき総合考察を行った。

第 2 章「評判への関心と利他行動の関連」では、評判への関心と利他行動の関連に関する 1 つの実証的研究を取り上げた。研究 1 では、2 種類の評判への関心として、良い評判に対する接近的動機である賞賛獲得と、悪い評判からの回避的動機である拒否回避を区別したうえで、各評判への関心と利他行動との関連を検討した。416 名の一般市民に対してオンラインでの質問紙調査を行い、参加者の賞賛獲得・拒否回避の各傾向と、日常生活の中で様々な対象（家族、友人・知人、他人）に対して利他行動を取っている頻度の関連を検討した。その結果、各評判への関心に特異的な利他行動との関連が見出された。具体的には、賞賛獲得は利他行動と概ね正に相関し、さらにその関係は、特に対象との社会的距離が遠くなるほど強くなる傾向があるのに対し、拒否回避の高い人ほど他人に対する利他行動をとらない傾向にあることが示された。賞賛獲得が、関係性の遠い対象への利他行動と関連することは、無関係の他者への利他行為者ほど高く評価される (Lin-Healy & Small, 2012) ことに基づくと考えられた。一方、拒否回避と他人への利他行動が負に関連することは、他人への利他行動が他の対象への利他行動に比べて一般的に行われにくい、すなわち規範的ではないためであるという可能性が考えられた。以上の通り、研究 1 では賞賛獲得・拒否回避ごとに利他行動との間に独立した関連を見出した。

第 3 章「評判への関心と利他行動の関連に対する社会的規範の調整効果」では、評判への関心と利他行動の関連が社会的規範によって調整されるかを検討した 1 つの実証的研究を取り上げた。研究 1 で見出された拒否回避と他人への利他行動の負の関連は、他人への利他行動が規範的ではない行動であることに起因する可能性が考えられたが、研究 1 では直接社会的規範を直接操作していなかったため、この可能性は考察にとどまっていた。そこで研究 2 では、社会的規範を操作したうえで、評判への関心と利他行動の関連が変わるかを検討した。320 名の一般市民を対象に、オンラインで賞賛獲得・拒否回避の各傾向を

測定するとともに、場面想定法実験を行い、見知らぬ他者が援助を必要としている場面（例：お年寄りが近くで落とし物を探している場面）を複数示し、その場面において自らが利他行動をとる可能性を尋ねた。その際に周りにはいる他者が利他的に振る舞っている、または振る舞っていないという情報のいずれかを社会的規範情報として提示した。その結果、拒否回避の高い人は、周りの他者が利他的に振る舞っていないときのみ、利他行動をとらない傾向がみられた。以上の通り、研究2では、拒否回避と利他行動の関連が社会的規範によって変わることが示された。

第4章「評判の手がかりが利他行動に及ぼす影響」では、評判への関心を喚起する手がかりが利他行動に及ぼす影響が社会的規範によって変わるかを検討した2つの実証的研究を取り上げた。一部の先行研究では観察者の存在を意識させる手がかり（例：目に似た模様の画像）が利他行動を促進する可能性が示唆されている（Haley & Fessler, 2005; Powell, Roberts, & Nettle, 2012）。しかし近年、利他行動の促進効果が示されていない研究も複数報告されており（Tane & Takezawa, 2011; Matsugasaki, Tsukamoto, & Ohtsubo, 2015）、メタ分析で調整要因を考慮しない場合には有意な効果が認められないことを指摘した研究もある（Northover, Pedersen, Cohen, and Andrews, 2017）。研究3A, 3Bでは、このような評判手がかりによる知見の矛盾を理解するうえで、心理的メカニズムについて考察した。評判手がかりは評判への関心を促進することによってのちの行動に影響を及ぼすと考えられる。ここで、評判手がかりが賞賛獲得を促進しているのか、拒否回避を促進しているのかという区別を考慮する必要性が考えられる。評判手がかりが賞賛獲得のみを高める場合、社会的規範にかかわらず利他行動は促進される一方、拒否回避を高める場合、周りが利他的に振る舞っているときのみ利他行動は促進され、周りが利他的に振る舞っていない場合は促進されない可能性がある。そこで社会的規範によって評判手がかりの効果が変わるかを検証する研究を実施した。研究3Aでは、139名の大学生・大学院生を対象として実験室実験を行い、その中で参加者に対して慈善活動に対する寄付を依頼した。その際、評判手がかりと社会的規範（過去の参加者数名の寄付額の平均値情報）を操作した。その結果、過去の実験参加者が利他的に振る舞っていたと伝えられたときには、評判手がかりは利他行動を促進していた一方、過去の

実験参加者が利他的に振る舞っていなかったと伝えられた場合、評判手がかりは利他行動を促進していなかった。この結果は、評判手がかりによって拒否回避が高められた結果として、のちの行動に影響が生じるという可能性を示唆していた。ただし先行研究の知見が混在していることも踏まえると、追試的検討を行って、この結果が再現されるかを検討する必要が考えられた。そこで研究 3B では、400 名の一般市民に対してオンラインでの実験を通して研究 3A の追試を行ったところ、研究 3A の結果は再現されなかった。結果が再現されなかった背景には、偽陽性の可能性に加えて、他の調整要因が存在する可能性もあり、今後の更なる検討の必要性が示唆された。

ここまでの研究 1, 2, 3A, B では、利他行動の行為者に着目した検討を行ってきた。第 5 章「極端な利他行動に対する評判」では、評判を与える側に着目し、規範から外れた利他行動に対して肯定的な評判が与えられにくい可能性を検討した 3 つの実証的研究を取り上げた。研究 1, 2 では拒否回避は規範的ではない利他行動と負に関連する可能性が示唆されたが、その原因として、規範的ではない利他行動に対して否定的な評判が与えられるという可能性が考えられた。この可能性を検討する研究として、研究 4A では、独裁者ゲームを模した、二者が金銭分配を行うという場面に関するシナリオをオンライン上で 682 人の参加者に呈示し、その場面で金銭を他者に分配せずに全て自分のものにした利己的な分配者、他者と平等に分けた分配者（平等分配者）、他者に全ての利益を与えた極端に利他的な分配者（全額分配者）のそれぞれに対する好意・尊敬評価を尋ねた。その結果、まず利己的な分配者に比べ、平等分配者・全額分配者はより高い好意・尊敬評価を得ていた。さらに、平等分配者に比べて全額分配者は定義上より利他的であるにもかかわらず、より低い好意評価を与えられていた。一方、尊敬評価は全額分配者および平等分配者で同程度であった。以上の通り、研究 4A では、評価の領域によっては、より利他的な行為者に対する評判が低くなる可能性が示唆された。研究 4B ではこの現象が社会的規範の観点から解釈可能かを検討するため、600 人の参加者を対象として、社会的規範を操作したうえで研究 4A と同様に、金銭分配者に対する好意評価・尊敬評価を尋ねる実験をオンラインで行った。その結果、規範から外れている度合いがより強い状況で、全額分配者は好意評価をより獲得しにくい傾向が見出された。

すなわち研究 4B では、より利他的な行動に対して肯定的な評価が与えられにくい一因として、その行動が規範から逸脱していることが関係している可能性が示唆された。以上の研究 4A, B を踏まえると、より利他的な行動に対して与えられる評価の低さが、その行動が社会的規範から外れていることに由来するならば、実験的に操作された社会的規範の強さだけでなく、実社会における社会的規範に関する文化差によっても利他行動に対する評判が異なる可能性がある。そこで研究 4C では、実社会における規範の厳格さの文化差によって、規範から外れた利他行動に対する評価が変わるかを調べるために、日本だけでなくアメリカ合衆国出身の参加者を対象とする検討を行った。先行研究の知見によると、日本は比較的規範逸脱に厳しく、アメリカは逸脱に寛容であるとされている (Gelfand et al., 2011)。そのため、日本に比べてアメリカでは、規範から外れた利他行動に対して高い好意評価が与えられる可能性がある。日本では 416 人、アメリカでは 400 人の一般市民を対象に、オンラインで研究 4A, B と同様のシナリオを示し、質問項目への回答を依頼した。研究 4C では、平等分配者・全額分配者に対する好意評価・尊敬評価に加えて、それぞれの行動が社会的規範から外れていると思う程度も尋ねた。実験の結果は仮説を支持しており、まず日本では研究 4A, B と同様、全額分配者は平等分配者ほど肯定的評価を与えられていなかった。一方アメリカでは、全額分配者も平等分配者と同様に好意評価を与えられていた。加えて、日本では全額分配者への低い好意評価が、その行動が規範から外れているという認識によって媒介されていた。一方アメリカでは、全額分配の方が規範から外れていると認識されていたが、好意評価は低下していなかった。以上の通り、研究 4A, 4B, 4C を通して、規範から外れた利他行動に対して、規範逸脱に厳しい地域では、良い評判が与えられにくいという可能性が示唆された。

第 6 章「全体考察」では、これまでの研究で得られた結果と先行研究を踏まえて、総合考察を行った。本論文では、評判に対する心理的選好に着目し、評判への関心が利他行動に至るメカニズムを検討した。研究 1, 2 では、2 種類の評判への関心を区別した検討により、賞賛獲得は利他行動を促進する一方で、拒否回避はその行動が社会的規範から外れている場合、利他行動を抑制する可能性を示した。研究 3A, 3B では、評判手がかりの効果が社会的規範によって変

わるかを検討した。さらに研究 4A, 4B, 4C では、拒否回避が高いほど利他行動がとられにくくなることの背景として、社会的規範から外れた利他行動に対して肯定的評価が与えられにくいことを示した。先行研究によれば、他者に評判を与えることを可能とするシステム自体は利他行動の維持・促進に寄与すると考えられているが (e.g., Milinski et al., 2002), 本論文は、心理的選好としての評判への関心に着目したときに、評判への関心が必ずしも利他行動を促進するとは限らず、評判への関心の種類や状況によっては利他行動を抑制しうることを示した点に新規性がある。また、本論文は、利他行動を促す社会のデザインを考えるうえでも示唆を与えると考えられる。

今後の展望として、第一に文化・地域差の更なる検討が挙げられる。研究 4C で観察された、規範から外れた利他行動に対する評判の文化差に基づけば、研究 1-3 で検討してきた評判への関心と利他行動の関連にも文化による違いが存在する可能性が考えられる。第二に、行動時の動機に着目した検討も必要である。第三に、一連の研究で操作した社会的規範の範囲が限定的なものであったことについて考慮する必要がある。最後に、共感など、利他行動を促す他の心理的要因と評判への関心の違いを踏まえ、包括的なモデルを描いていく必要がある。